

「どうけ百人一首」という作品群

鶴田洋子

一 はじめに

北尾政演画作「御存知商売物」（天明二年 1782）は当時の出版物を擬人化し、新旧の戦いを異類合戦風に描いた黄表紙である。当時の出版事情を反映する興味深い山東京伝の作であるが、その中で時代遅れの出版物として登場する本に「どうけ百人一首」がある。「いろは短歌」と共に擬人化されて登場するのだが、具体的には近藤清春画作「どうけ百人一首」を指しているといえる。しかし、「どうけ百人一首」は一つの作の名というより、複数の出版物を指していると考えたほうがよいと思われる。現在でも「どうけ百人一首」という名が冠せられている異種異版は多数存在する。

いわゆる「小倉百人一首」以外の百人百首は「異種百人一首」と呼ばれるが、「どうけ百人一首」はその中の一群を形成している。黄表紙「御存知商売物」に登場するということ自体、「どうけ百人一首」という書名は江戸の人々によく知られていたことを物語っている。なぜこのように多数の作があるのか、どのように一つの作から次の作が生まれていくのか、群の形態を整理し江戸時代中期から後期にかけて江戸戯作のあり方を考察することがこの稿の目的である。

二 「どうけ百人一首」とは

吉田幸一氏によると定家の「小倉百人一首」以外のもので百人百首を集めたものは「異種百人一首」と呼ばれ、最初に明暦三年（1657）の「新百人一首」があげられるという（注1）。宮武外骨は異種百人一首百六十種を得、日本に於ける異種百人一首蒐集者と誇称しても良いほどであると述べているが、更に穂積重遠先生の蔵本として四六種を追加して紹介している。外骨のリストの最初に挙げられているのもこの「新百人一首」である。外骨もリストを作るにあたって、書名に「百人一首」の名があっても内容は百人一首ではないから採らなかったとか、名前に百人一首はないが内容から見て異種百人一首であるからとったとか、其の判定に苦慮しているところがうかがえる（注2）。実際

に本を手にとってみると、百首の内容を別の歌人にあてはめたものであったり、観光案内と抱き合わせてある庶民向きの本であったりして、多彩な内容に百人一首という名前が冠せられていることがわかり、どう扱うべきか判断に迷うことが少なくない。「どうけ百人一首」という題も漢字やひらがななど一様ではなく、形態もひとつおりではない。これから取り上げようとする作も外骨のリストとは一致していない。当然「異種百人一首」というくくりが妥当かどうかという疑問も生じるのだが、ここでは「異種百人一首」を論ずるのが目的ではなく、その中の「どうけ百人一首」という名がついた何種類かの作をたどっていくことが目的なので、そのことには触れない。ここでは「どうけ百人一首」と題にある版本に限って見ていくことにする。内容が百人一首の狂歌であっても題が違う場合は除外した。題名がおおむね合えば、漢字表記の違い、角書きの有無などは問わず見ていくことにした。

今回調査することができたのは次の本である。（表1）

表1

1	どうけ百人一首	享保中期か	近藤清春画		稀書複製会本 大平文庫17	I - A-1
2	道化百人一首	刊年不明			東京誌料本	I - A-2
3	道化百人一首	安永8年再		鶴屋喜右衛門	蓬左文庫本	I - A-3
4	道化百人一首	天明4年		薦屋重三郎	加賀文庫本 東京博物館本	I - A-3
5	大谷徳治 どうけ百人一首	寛政5年	恋川好町		国会図書館本 加賀文庫本 近世庶民生活集成	I - B-2
6	物申す どうれ百首	寛政5年	恋川好町		東京博物館本 加賀文庫本	I - B-1
7	道化百人一首	刊年不明			東洋岩崎文庫本	I - A-3
8	道外百人一首	享和4年か	山東京伝		早稲田大学本	I - B-1
9	風流絵入笑含 道化百人一首	文化5年		泉屋市兵衛	加賀文庫本 東京博物館本 早稲田大学本 新潟産業大学本	I - A-3
10	道外百人一首	刊年不明			早稲田大学本	I - A-3
11	道化百人一首 もじりうた	文化年間		森屋治兵衛	東京博物館本	I - B-1
12	道外百人一首	弘化再刻			早稲田大学本	I - B-1
13	浮世絵書 道外百人一首	文化6年か	酔放逸人 (北尾重政)	森屋治兵衛	早稲田大学本 大平文庫10	I - A-3
14	新撰辰理 道化百人一首	享和4年		鶴屋喜右衛門	東京誌料本	I - B-1
15	戯劇百人一首	天保4年	越谷山人		新潟産業大学本 蓬左文庫本	II - A
16	道外百人一首				蓬左文庫本	II - A
17	道化百人一首	弘化4年 明治17年	愚山人 尾崎写		蓬左文庫本 蓬左文庫本	II - A
18	教歌道化百人一首	嘉永5年	勸善堂春水	泉屋市兵衛	新潟産業大学本 蓬左文庫本	II - A
19	童戯百人一首	明治6年	総生寛	椀屋喜兵衛	大平文庫34	II - A
20	道戯百人一首	明治16年	前島和橋	文盛堂	大平文庫34	II - A
21	戯心百人一首	明治21年	高崎龍太郎		新潟産業大学本	II - A

先に述べたように題名に「どうけ百人一首」とないものは取り上げなかったため、近藤清春画作の「今様職人づくし百人一首」「江戸名所百人一首」は百人一首を本歌とする狂歌集であるが除外した。また大平文庫「どうけ百人一首」に収録されている「地口絵手本初・二編」もはずした。「どうけ百人一首」という題名を持つ版本でも、今回調査できなかった本がまだ全国に多数存在すると思われる。木村八重子氏によると、ほぼ時代を追って幕末に至るまで多数の版本が現存し、版の摩耗度から見てそれぞれの印形部数も多く江戸で長く愛好された状がうかがえるという（注3）。

ここではこの作品群がどのように変容を遂げていったかということを考えるために、引用の形態から仮に次の二つのグループに分けて考えてみることにする。

I. 全体として「百人一首」を想起するように作られたもの

A. 清春「どうけ百人一首」と其の流れ。

- (1) 清春「どうけ百人一首」
- (2) 狂歌は (1) とほぼ同じ、絵もかなりの部分類似がみられるもの
- (3) 狂歌は (1) とほぼ同じ、主に絵などで加工し新鮮さを加味したもの

B. Aグループをふまえて更に黄表紙本狂歌本に仕立てたもの

- (1) Aの作品群をふまえつつ更に狂歌を変えているもの
- (2) Aの作品群の狂歌と絵を引用しつつ物語となしているもの

II. 下の句または上の句のみ百人一首をそのまま借用して作られたもの

A. 上の句だけ変えているもの

B. 下の句だけ変えているもの

引用の形態として、I のグループは元歌である「小倉百人一首」のどこからどこまでが引用であるか、意味あるまとまりとして取り出すことが出来ない。和歌の並び順を踏襲し、いくつかの共通する音を配して本歌を想起させる方法を採用している。本歌の意味のあるまとまりを無視して、音を不規則に重ねることによって、意味上に大きなずれが生じる。引用した古典、慣用句、歌舞伎のせりふなどを類似した音で思い起こさせつつ、まったく内容の違うものを盛り込むという江戸庶民に愛好されていた言語遊戯「地口」と同じ方法によるものである。「小倉」はかるたとして庶民にも広まりつつあった。I-Aの作品群は音声化された古典に庶民的な内容を盛り込み、その落差を楽しむことをねらいとしていると言える。更にI-B-(1)はI-Aをふまえて更に新しい狂歌を造りかえ、I-B-(2)は「小倉」を元にした狂歌を引用したとはっきり記号で示し

つつ、更に絵で先行の作を引用しながら黄表紙として筋をもつ作を構成している。

Ⅱのグループはある部分、つまり下の句か上の句かが「小倉」そのままであり引用したものを意味あるまとまりとして取り出すことが出来る。上か下の半分を固定することにより本歌と間に距離が生じ意外性をどこまで発揮できるかという、Ⅰグループとは違う意味での言語遊戯的な興味もあったように思われる。

同じような題名であってもその中味を調べるとかなりの違いがあるといえる。

三 清春の「どうけ百人一首」

近藤助五郎清春画作「どうけ百人一首」は、前にも述べたようにⅠのグループの祖とされている。半ページを上下二つに区切って一コマとし、それぞれに狂歌と絵が書き込まれている。絵には詞書きが書き込まれ、吹き出しはないものの今日でいう漫画のような体裁になっている。

てんちてんわううたに

あきの田のかりほすまではひよりよくわかこどもらをらくにすごさん

ちとうてん王うたに

春過ぎてなつきてみればしろかたびら子どもほしがあまがかかさま

かきのもとの人丸

あしびきの山やがうどんしるもよくながながしきをひとりすすらん

山辺のあかひと

たびのうらにふみつけてみればいたづらなうりのたねをばつつみおきつつ

さるまるたゆう

おくさまのふばこふみわりなくしかがまどふていだすぜにぞかなしき

ちゆうなごんやかもち

かささしてわたせるいたにはすあめのしろきをみればこそふきにけり

あへのなかまる

あまざけをわかつてみればかすかあるおかさにひとつありもしようがも

きせんほうし

わがうおはみうらのなまこしばさかなより物うりと人はいふなり

おのの小町

かほのいろはかはりにけりないたはしやわるいよたかになじみせしまに

(傍点筆者)

「御存知商売物」に引用されているのは最初の「わがこどもらをらくにすごさん」であり、図柄も農民の絵である。「いろは短歌」ととも登場すれば、黄表紙の読者はすぐに何を指しているかわかっただろう。〈図1〉京伝「どうけ百人一首」の序に、“延宝天和の比より今にいたりて此百人一首のわらひ絶えず道外というなをこうふらしめしもことはりあるかな”とある。木村八重子氏は近藤清春画作「どうけ百人一首」は享保（1716～1736）村田屋治兵衛版がはじめであり、これらの祖本であろうと述べておられる。また、浅野秀剛氏は解題のなかで刊年は享保期であることは間違いなしとしておられる。

天皇の歌をもじって農民の収穫の姿を描くという冒頭の狂歌は「御存知商売物」にも引用されているように「どうけ百人一首」そのものを指すことになった。和歌の雅の世界を庶民の世界に取りなし、その落差から生じる滑稽味がねらいとするところである。当時謡曲や歌舞伎のせりふなどをもとに地口などの言語遊戯が盛んに行われていた（注5）ことも背景にある。絵には清春独特の表情があり、時代の雰囲気を与え、また現代人であってもその心情が共感できるといったものを見ることが出来る。

近藤清春は享保期を中心として活躍した画工である。浄瑠璃本、草双紙（赤本）の作も他に数多くある。「どうけ百人一首」はこれ以後も形を変えて人々の前に登場することになるが「いろは短歌」と同様に庶民の支持を得たと考えられる。近藤助五郎清春画作の署名がある百人一首の狂歌集はその外二作あり、狂歌の作者としても評価すべきという説がある（注6）。「どうけ」が長く人々に愛好されたことにより、清春の名前も人々の記憶に止まることになったという（注7）。

四 清春「どうけ百人一首」のその後

清春の狂歌はほとんど変更されないまま「どうけ百人一首」という名で出版された本は数多く見ることが出来る。

赤本仕立ての東京誌料本は一部分が残っているのみであるが、中本の半ページを三つに分けて狂歌一首ずつとそれぞれの絵が書かれている。清春版と東京誌料本の絵は人物の描き方や構図の点で共通点があるのだが、東京誌料本は詞書きがなくなっている。この本については不完全な形で残っているということもあって、はっきりしたことはわかっていない。ただ、筆者には清春の署名が入っている稀書複製会本のような完成度の高いものではないように見受けられる。また、大平書屋版「どうけ百人一首三部作」に絵師不詳享保後期から延享頃という肥田皓三氏蔵本の写真が掲載されているが、一ペー

ジを四つに区切りその一つずつに絵と狂歌を書き込んでいく体裁になっている。

絵が大きく変更を加えられたのは鶴屋版である。筆者の見たものは安永七年の再版本であるからそれ以前に出版されたものがあるのだろう。この本は肥田氏蔵本と同じように中本一ページを縦横四つに区切り、それぞれに狂歌と絵だけが描かれている。かるたとしての百人一首を連想させるこの体裁は以後定着し、清春版「どうけ」の流れでこれ以降の出版と思われるものはこの方式になっている。狂歌に添えられた絵は大きく変更が加えられている。構図などではわずかに共通点が見られるものの、人物の表情衣装などがほぼ全面的に書き換えられている。

恋川春町「金々先生栄華の夢」以来、草双紙は赤本黒本の時代から黄表紙の時代になったということが意識され、そのことが「道化百人一首」にも及び、当世風に塗り替えられたと解すべきなのであろうか。「御存知商売物」の結末も「黒・赤本も根性を綴じ直されてより、元のごとく繁盛する」（『京伝全集』第一巻p119）とあり、古風であるものに新鮮味を加味して出版することが行われたことを示している。清春はまさに赤本黒本時代を代表する古風な画風の作者であった。

鶴屋版以降と見られるものは狂歌はほとんど変わりがなくても、絵で見ていくとそれぞれの本によって異同が見られる。表2は、清春「どうけ」と発行部数が多かったのではないかと推測される四種それに好町「どうけ」の絵だけを比較したものである。構図や人物の表情などに著しい類似が見られるものを記号で示した。酷似しているかという判定には迷うところがあるが、此处では人物の配置、表情などを中心に判断した。着物の柄、置かれている道具などが違っても似ていることとした。（図1、図2参照）

この表からA 清春本とB 鶴屋版は違う絵がつけられていることがわかる。またCはBをそのままコピーしたものではないし、無関係に絵が配されているのではないことがわかる。前に述べたように清春の「どうけ」の狂歌はそのまま踏襲してあるものの、Bの本が全く違う絵を配したのは、当世風の意識をそこに出したためと考えられる。それ以後も絵を含めて考えるとほぼ同一の狂歌がその内容であったとしても、そっくり同じものが出版されたわけではないということになる。一つの作は次の作と同じような絵を配しているのだが、それも全部同じなのではなく一部分が同じだが一部分は違うという形になって次の出版物が構成されている。

どうしてこのような形で出版され続けたのだろうか。全部同じ或いは全部違うというのではなく少しずつ違うということに意味があったのだろうか。同じということを考えてみると、安易にコピーしたというだけではなく、コピーしたということをむしろ積極的に読者に知らせる必要があったと思われるのである。そして、全面的にコピーしてい

るというのではないことを知らせるために何コマかは違う絵を配したのではないのだろうか。「どうけ」の狂歌は繰り返し出版されていくうちに人々に知られるようになり、又絵も流通するうちにいくつかが定着していったと思われる。狂歌として定着したのは清春「どうけ」であるが、前述したように絵は定着しなかった。鶴屋版・蔦屋版など発行部数が多いとみられる版の絵が定着していった。其の定着した絵をふまえつつ新味を加えて新たに同じ題名で次々と類似のものが出版されていったのではないだろうか。新味とはたとえば和歌三神、または三夕の狂歌を加えたり「いろはたんか」を入れたりして、全面的なコピーではないように工夫するということである。

これらの作品群はどれをとっても現代語でいう“独創性”というものではない。狂歌でも、絵でもどのように先行作品を引用するかということに関心が寄せられていたように思う。引用し、それを加工してみせることが一つの作をなすことだった。引用した狂歌や絵をそれと読者に知らせながら独自の工夫で新味を加え、そのことを承知している読者と共に楽しむことが、庶民的な文芸である草双紙の“創作”ではなかったかと思われるのである。

五 「どうけ」の黄表紙

恋川好町「どうけ百人一首」は「どうけ」の狂歌を全編にちりばめて絵入りの物語にした黄表紙である。この作品は「小倉百人一首」、清春「どうけ」、更にあの狂歌にはこの絵がついていると人々によく知られているという前提があって初めて笑いが成り立つ。「小倉」の第三次加工作ともいえようか。

今はむかし小くら山のほとりにでんぢでんぞうといふ百せうあり。もとはでんぢもおほくもちて、村にてもでんぢをいめやうによばれたほどの百せうなりしが、今はやうやうおやこ三人ぐらしとなり正じきいつへんに世をおくり、むすめひとりをつのみにふうふともかせぎにせいをいだし「あきのたのかりほすまでにひよりよく我が子共らをらくにすごさんと、朝夕天とうさまをおがんでくらす。

かうかまをまえにをいて天たう様をおがむ所はけしの介がおちゃとうをすといふみだかこれも子どもらをまめでとっくりにそだてたいはつかりでござい。(1ウ)

作者恋川好町は狂歌師鹿津部真顔である。人々によく知られた「どうけ」の狂歌と絵柄を引用し、そこを世界とする一趣向として好町は物語性を加味した。引用符を使って清春「どうけ」の狂歌を引用し、さらにはかなりの部分に蔦屋版の絵を引用した理由がここ

こにある（注7）。音声として人々によく知られた「小倉」を本歌とする清春版「どうけ」を引用したことを記号で示しつつ、出版物として流通していた「どうけ」の絵の部分も取り込むという視覚的な引用も行い物語をすすめた。

全部がコピーであれば、好町の趣向は成り立たないことになり、制作の理由は失われてしまう。先行作品をコピーしなければ読者と同じ場に立てず、そうかと言って先行作品のコピーを並べるばかりでは好町は“創作”したことにならなくなってしまふ。その意図が成功しているかどうかは筆者としては疑問が残るが、作り方という点から言えば山東京伝の「どうけ百人一首」にも共通する手法であろう。京伝の場合は絵は蔦屋版などと全く同じではないが、それが下敷きになっていることは明らかである。京伝が「御存知商売物」で述べているように「この世は夢の浮き橋と心得、お子さま方の御意に叶うように、趣向に精を」出したわけである。又好町にはほかに「物申すどうれ百首」という狂歌本があるが、京伝作とおなじく一連の「どうけ」を人々がよく知っていることが前提になり、当時の狂歌作者を登場させ清春「どうけ」を本歌とする狂歌を並べ笑いを提供している。

このグループは黄表紙にせよ狂歌にせよ、小倉百人一首、清春「どうけ」、「どうけ」の絵と三重の下敷きを重ねて成立しているもので、より複雑になっていると言える。どのように先行作品を重ね合せるか、加えてどのようなものを付け加えるかと言ったところに興味が寄せられていると言えよう。新しい趣向を盛り込む世界を提供していることは清春の「いろは短歌」にも言える。（注8）ただ、「どうけ百人一首」のほうは「小倉」が元になっている点で裾野が広いようである。

表2

	A	B	C	D	E	F		A	B	C	D	E	F		A	B	C	D	E	F		A	B	C	D	E	F
1		*	*	*		*	26		*	*	※	※	*	51		*	*	*	*		76		*	*	*	*	
2			*	*		*	27	*		*	*	*	*	52		*	*	※	※		77		*	*	※	※	
3			*	*		*	28			*	*	*		53		*	*	※	※		78		*	*	※	※	
4			*	*			29		*	*	※	※		54		*	*	*			79		*	*	※	※	
5	*	*	*	*	*	*	30		*	*	*	*		55		*	*	※	※	*	80		*	*	※	※	
6			*	*			31		*	*	*	*		56		*	*	※	※		81		*	*	※	※	
7		*	*	*			32		*	*	*	*		57		*	*	※	※	*	82		*	*	※	※	
8		*	*	*	*		33		*	*	※	※		58		*	*	※	※	*	83		*	*	※	※	
9			*	*		*	34		*	*	※	※		59		*	*	*	*		84		*	*	※	※	*
10		*	*	*		*	35		*	*	※	※	*	60		*	*	※	※		85		*	*	※	※	
11			*	*			36		*	*	※	※	*	61		/	*	*	*		86		*	*	※	※	*
12		*	*	*	*	*	37		*	*	※	※		62		/		*	*		87		*	*	※	※	
13			*	*	*		38		*	*	※	※		63		/		*	*		88		*	*	※	※	
14	*	*	*	※	※	*	39		*	*	※	※		64		/		*	*		89		*	*	※	※	
15		*	*	*		*	40		*	*	※	※		65		*	*	※	※		90		*	*	※	※	
16		*	*	*			41		*	*	※	※		66		*	*	※	※		91		*	*	※	※	
17		*	*	*	*		42		*	*	※	※		67		*	*	※	※	※	92		*	*	※	※	
18		*	*	*	*	*	43	*	*	*	※	※	*	68		*	*	※	※		93		*	*	※	※	*
19		*	*	*	*		44		*	*	※	※	*	69		*	*	※	※		94		*	*	※	※	*
20		*	*	*	*		45		*	*	※	※		70		*	*	※	※	※	95		*	*	※	※	
21		*	*	*	*	*	46		*	*	※	※		71		*	*	*	*		96		*	*	※	※	*
22		*	*	*		*	47		*	*	※	※	*	72		*	*	※	※		97		*	*	※	※	
23		*	*		*		48		*	*	※	※		73		*	*	※	※		98		*	*	※	※	
24		*	*	*	*		49		*	*	※	※		74		*	*	※	※		99		*	*	※	※	
25		*	*	※	※	*	50		*	*	※	※		75		*	*	*	*		10		*	*	※	※	*

A：享保年間 近藤清春画作 稀書複製会本
 B：安永八年再版 鶴屋喜右衛門版
 C：天明四年 蔦屋重三郎版
 D：文化五年 泉屋市兵衛版
 E：文化六年 北尾重政画 大平文庫10所収
 F：寛政五年 恋川好町作 黄表紙

図 1



(A)



(B)



(C)



(D)



(E)



(F)

図 2



(A)



(B)



(C)



(D)



(E)



(F)

六 下の句だけ百人一首を利用しているもの

この類は清春「どうけ」をはばかりのか「戯劇」とか「童戯」とか漢字で書いて「どうけ」と読ませている例を多く見ることができる。

天智天皇 広ぶたを前にお酌は手をのばしわが衣では露にぬれつつ
持統天皇 苦しがり質屋がみせにあづけおき衣ほすてふ天のかく山
柿本人麿 親類の産に女房をてつだはせながながしき夜をひとりかもねむ
山辺赤人 焼芋のみせびらきするその頃はふじの高嶺に雪はふりつつ
猿丸太夫 小夜ふけてまひ子まひ子とよびあるく声聞く時ぞ秋はかなしき

(歓善堂春水「教歌道化百人一首」嘉永五年、傍点筆者)

「小倉」の下の句をそっくり借用しているという方法である。音声的にも類似することなく上の句の「小倉」を作り替え、下の句だけはそのまま写したというやり方である。反対に上の句だけ借用し下の句のみ作り替えたものも見られる。清春「どうけ」が音声的な引用ということを言うとするれば、こちらは下の句の意味あるまとまりがそのまま引用されているので、かなり作りやすいのではないのかと思われる。この方法で作られた本のうち清春「どうけ」のように庶民に定着した作はなかったようだ。したがって、絵もそれぞれ全く違って一つの利用して次の作が生まれるといったような形跡はなかった。清春「どうけ」の一連の流れより時代が下り、明治まで作られていた。識字層の拡大とつながる現象なのかとも考える。清春「どうけ」は広く愛好されたといっても、文句や絵が定着しその枠が固定してくるとやはり陳腐化し、新しい時代を表現できなくなった。このどちらか半分を写したタイプの本の中には○とか×とか記号が書きこまれ、読者がその出来不出来を判定していると窺われる本があった。百人一首を元にした狂歌は時代が変わっても作られ続けるのだが、清春「どうけ」とその流れは江戸時代と共に終わり、新しい時代を写す一つの鏡として上の句を借用し下の句だけ作りかえるこの形式が役割を果たしているようにも思われる。

七 終わりに

はじめに「どうけ百人一首」は一冊の作に冠せられた名ではないと述べた。清春「どうけ」がどのように利用されたかを考えると、江戸時代の「創作」の一断面を窺うことができるように思う。ちょうど富士山のように高く美しい山を背景に、日常的な建物

が造られ、更に当世風にその内部を改装していくといったような作り方といえいいのであろうか。好町「どうけ」などは元歌から考えると三度の加工を経て成立したと言うことになり、一つの作から二重三重の笑いをそこに見出すことが意図されたわけである。そこには同じ知識を持った読者と作者が共通の場で笑いを楽しむという仕掛けが用意されていた。加工を経る度に下敷きになっているものの知識を持っているより多くの読者に笑いを提供することが出来るわけである。しかし、清春の流れは定着すると共に次第に類型化し陳腐になって江戸時代と共に消えていったといってもいいと思う。再々利用にも限度というものがあつたようである。

「どうけ百人一首」という名で出された多数の出版物は江戸時代の庶民に長く親しまれた。作者と読者はこの庶民的な本を共通の知識として、更に次の作をも楽しむことができたのであろう。そこでは先行の作を引用することが次の作を生む技法として使われた。それはまた、古典に親しみ受容するきわめて庶民的な方法でもあつたのではないかと思うのである。

- (注1) 「新百人一首」大本二冊常德院撰。明暦三（1957）年版。谷岡七左右衛門板行。文明一五年沙門跋によれば、小倉百首以外の歌仙の歌を選んだ由である。文武天皇以下花園院までに及んでいる。すべて二一代集の歌からとり、女流歌人は十名しかいない。異種百人一首の最初である。（吉田幸一「異種百人一首」別冊太陽）
- (注2) 異種百人一首とは、藤原定家卿が小倉の山荘で式紙に書かれたと云ふ天智天皇以下の百人一首でないものを云ふのであるが、茲に二三の説明をしなければならぬ事がある。
1, 百人一首と云ふ外題でも、内容が百人一首でないものは採らない。朋誠堂喜三二「景清百人一首」恋川好町作「大谷徳治道化百人一首」二世春町作「鎌倉百人一首」などは黄表紙（戯作小説）である。また、元禄一五年十月大阪道頓堀豊竹座で興行した芝居の筋書本に「新百人一首」と云ふのがある。是等は採らない。（宮武外骨「川柳と百人一首」大正一三年）
- (注3) ほぼ時代を追って幕末に到るまで多種の版本が現存する。だいたい中本形を踏襲し、様式や絵様・風俗・文句の一部に少しずつ変更を加えている。版の摩滅度から見て、それぞれの印行部数も多く、江戸で長く広く愛好された状がうかがわれる。（木村八重子「古典文学事典」）
- (注4) 一体地口という語が急速に広まったのは地口付という雑俳の一種が、享保年間に流行したためである。（鈴木棠三「ことば遊び辞典」解説昭和三四年東京堂）
- (注5) 「百人一首」物のうち「どうけ百人一首」は殊におこなわれ、種々の体裁の類似本、踏襲本が近世を通じて刊行されている。狂歌のみならず絵組まで真似たもの、狂歌絵組を全く新たにしたものから、これを下敷きにした黄表紙まである。そのおかげもあって清春の名は細々とであるが確実に語り継がれることになったのである。（浅野秀剛「どうけ百人一首」三部作）
- (注6) （清春は）絵が上手であつたばかりでなく、狂歌も亦あなどり難き腕前があり、画家の余技とは思はれない程であつた。のみならず彼一人のあたまで類本三種も作り、重複合掌の弊にも堕ちず、それぞれ変った意匠を凝している点も凡庸者流の逮び易からざるところ所といはざるを得ない。（菅竹浦「近世狂歌史」昭和一〇年）
- (注7) 拙稿「どうけ百人一首の引用」1998年「立教大学日本語研究」第5号
- (注8) 拙稿「いろは短歌をめぐる」1988年「立教大学日本文学」第61号

参考文献

- 宮武外骨 「狂歌と川柳」大正十三年（1924） 半狂堂
水谷不倒 「古版小説挿画史」昭和四八年（1973）「水谷不倒著作集」第八巻中央公論社
菅竹浦 「近世狂歌史」昭和十年（1935） 中西書房
中村幸彦 「戯作論」昭和四一年（1966） 角川書店
吉田幸一 「異種百人一首」別冊太陽 昭和四七年（1972） 平凡社
浅野秀剛解題 「どうけ百人一首三部作」昭和五七年（1982） 大平文庫17
武藤禎夫編 「もじり百人一首三種」平成八年（1996） 太平文庫34 太平書屋